

TAC2 次本試験分析会について

今回公表している TAC の解答例は、あくまで「出題者が期待していたと考えられる最も妥当性の高い内容」をあげています。作成にあたっては複数の講師が 80 分という時間制限なしに作成したものですから、試験場で 80 分という制限時間内に「合格するために作成する現実的な解答内容」と同じではありません。また、当然ですが、出題者は別の解答を期待している可能性は否定できませんし、最終的に解答として採用しなかった内容も複数あります。

以上のことを踏まえ、TAC の「2 次本試験分析会」では、TAC の解答例を解説することではなく、できる限り幅広く解答の可能性を探ることをねらいとしています。受験した皆さんの「自分の解答（答案）がどの程度の得点になるのか」という最大の興味にこたえるような内容になるよう心がけていますので、ぜひご参加ください。もちろん、当日は個別の質問にもおこたえします。

<全体講評>

全体としては、昨年より難易度は“やや低下した”という印象です。もちろん、昨年に比べれば、ということであって、決して誰でも簡単に得点できるということではありません。事例Ⅰは事例Ⅲのような事例で（昨年は事例Ⅱのような事例でした）、しかも問題本文中の根拠がうすいためかなりの対応力が必要です。事例Ⅱ、事例Ⅲは根拠がはっきりしない問題があるものの、全体的にはそれなりに得点することができる問題だったと思います。最後の事例Ⅳは第 2 問、第 3 問の 50 点分の対応で混乱し、バランスを崩した受験生が少なくなかったようです。また、昨年までの出題と若干異なるパターンでしたので、その点でも、全体的に対応は難しかったと思います。

以上が全体的な印象です。これまで行われてきた 2 次筆記試験と比較して、難易度や出題内容の変化はもちろんありますが、合格するために必要な対応はなんら変わりません。したがって、「大事故を連発しない」取り組みを実践できるための対策は有効であったと思いますし、また、来年もこの傾向は変わらないと考えてよいでしょう。

事例ごとの講評を簡単に行います。

事例Ⅰ

事例企業が機内食の製造販売を行っている企業であり、コスト削減や生産性向上など事例Ⅲっぽい内容の事例でした。問題要求も 150 字以内が 2 つと、事例Ⅲのパターンと似ています。特徴としては、問題本文中の根拠がうすい問題（第 2 問、第 4 問）があること、全体的に解答の構成要素の判断（および解答の編集）が難しいこと、があげられます。ただし、すべての問題において「ある程度の得点が可能な解答」を作成することは、例年に比べると難しくなかったと思います。

事例Ⅱ

温泉街にある老舗旅館の事例です。配点 30 点の第 5 問が対応しやすいので、全体の得点を積み上げやすい事例問題といえます。ただし、事例Ⅱの特徴である「要求と根拠の対応付け」はそれほど簡単ではありません。たとえばほとんどの受験者が気づいたであろう「毛筆で書く御礼状」をどの問題の根拠として使うか、の判断はかなり難しかったと思います。

また、事例全体として深読みすると「アジア地域の富裕層観光客を狙うことはコンセプトからはずれないのか」や「みかん狩りやイチゴ狩り目当ての客を H 温泉に集めたとして、それは B 社にとってよいことなのか」など気になってしまう内容ですが、あくまで「与えられた根拠を素直に使う方針」で対応することが求められていたと思います。

事例Ⅲ

プラスチック製品製造に使用する金型を生産している企業が題材です。「まったく対応が困難な問題」はありませんが、各問題の配点が大きいため、「偏った内容の解答でほとんど得点にならないことを避ける」ことを最優先する対応が求められます。

特に対応上、注意が必要だったのは、第 2 問（設問 2）と第 4 問の 2 つです。前者は、「大型金型の生産要請に応えるため」の課題ですから、現状の問題点を要求しているわけではありません。しかし、本文中で見つけやすいのは「生産面での問題点」ですので、そちらを中心に解答を構成した場合、大きなダメージを受ける可能性があります。また後者（第 4 問）は、「育成方法」を要求していますが、育成の現状についてはまったく根拠が示されていません。根拠があるのは「採用」のほうですから、採用を含めた解答を作成するほうが安全です。

全体としては、事例Ⅲとして標準的な難易度だと思います。

事例Ⅳ

題材は、工業製品全般の塗装を行っている企業です。経営分析が時系列比較ではなく同業他社比較であったこと、第 2 問と第 3 問は既存設備から新規設備への取替え投資に関連する問題で配点が合計で 50 点分あったこと（しかも第 3 問は計算問題のみ）、第 4 問の記述問題の一部がシステム関連ではなく法務関連であったこと、など問題構成・内容的に変化しました。また、第 2 問は、ネットのキャッシュフローが一定ではないにもかかわらず年金現価係数が与えられていたこと、第 3 問は、「税引前純利益」が「税引前当期純利益＝取替投資を行った場合の利益額」なのか、「既存設備と新設備の利益の差額」なのかの判断がつかないこと、により混乱した受験者が少なくなかったようです。

冷静に対応すれば、6 割以上得点することは十分可能ですが、試験当日 4 つ目の事例であることから精神的、肉体的疲労も加わり思い通りの対応ができなかった受験者は少なくないと思われます。